

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第12回

## \* マフィアと泥棒 -イタリアはコワくてアブナイ国ですか?-\*

立元 義弘

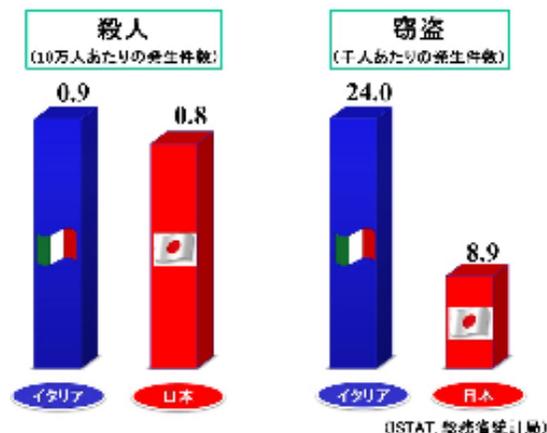
イタリアに住んでいた時、「イタリアでスリや置き引きにあわないための秘訣は何でしょう?」とか、「イタリアでビジネスをやっていると、マフィアに怖い目にあわされたこととかあるんじゃないですか?」といった質問をよく受けたのですが、残念ながら大方の日本人には、イタリアという国はマフィアが闊歩し、泥棒がうじゃうじゃというイメージが強いようです。

私はこうした質問を受けるたびにいつも戸惑いを感じながら、「はあ〜」とか「うーん」とか要領を得ない答えをしていたような気がします。現実にはマフィアが社会に巣食うガンとして存在するのは紛れもない事実ですし、少なくとも私たちが住む日本よりは犯罪に対する個人個人の防備や心構えが必要な社会であるということも事実なのですが、かといって、私自身がマフィアに怖い目にあわされたという経験はありませんし、一度もスリや置き引きの被害にあったことがないわけではないのですが、常に財布を腹巻きに忍ばせ、お金を靴下に隠して街を歩いていたわけでもありません。しかし、多くの日本人の眼にはイタリアという国はどうもそのようなところのように映るらしくて、そうした期待(?)を裏切る解説をするのも気が引けますから、「はあ〜」とか「うーん」という返事になってしまうのです。

毎日の三面記事報道を見ていると、イタリアでも陰惨な殺人事件、指名手配中だったマフィア幹部の逮捕、汚職やわいろの摘発、強盗・傷害事件

などなど話題には事欠きません。また最近はいじめや女性を狙った暴行・殺人事件の増加が社会問題化していて、ここ数年減少傾向が続いていた犯罪摘発件数も2011年には4年ぶりに増加に転じ、実際に国民の84%が5年前より犯罪が増加していると感じています。

その中で殺人などの凶悪犯罪はこのところ年々減少が続いており、2011年に起こった殺人事件は550件で人口10万人当たりの発生件数は0.9件です。日本での発生率(1051件、同0.8件)より少し高いですが、何と3.4件もあった1991年をピークに以降は劇的に減少してきており、現在では欧州の中でも最も殺人事件の少ない国の一つです。〈図1〉



【<図1>日伊犯罪発生率比較(2011年)】

550件の殺人事件の約1割にあたる53件がマフィアの絡む事件で、そのほとんどが4大マフィア

組織の拠点である南部4州に集中していますが、一年間に起こる殺人事件のおよそ4割がマフィアがらみの事件であった1990年代初頭と比べると、こちらもずいぶん沈静化してきています。とはいえやはり、これらの州では殺人事件の発生率は高く、中でも最も強力で危険な組織とされるンドランゲタの本拠地カラブリア州に至っては2.9件と、イタリア全国平均の3倍に跳ね上がります。〈図2〉



【〈図2〉 主なマフィア組織と本拠地】

こうしたマフィア組織は、日本の暴力団組織で言えば〇〇組や△△会にあたるコスケ(cosche)と呼ばれる多くのファミリーからなっており、その傘下にアフィリアーティ(affiliati)と呼ばれる構成員とフランケツジャーティ(francheggiati)と呼ばれる準構成員で組織されています。そしてその数はアフィリアーティとフランケツジャーティを合わせておよそ23万9千人とされており、日本の暴力団員数が構成員と準構成員を合わせて7万9千人(2010年現在、警視庁調べ)であることと比べると、沈静化が進んできているとはいえ、いまだに如何に大きな社会問題であるかがわかります。

マフィア組織に関わりを持つ人間のことをマフィオーゾといいますが、日本のやくざのように一見してその世界の人とわかるわけではなく、まして、街中で〇〇ファミリーと代紋付きの看板をあげている事務所があるわけでもなく、日常の社会生活では誰がマフィオーゾなのかは、まずわかりません。不運にもマフィア間の抗争の流れ弾にでも当たるといようなことでもない限り、多くの一般庶民の日常生活においても無縁の世界であると言

えるでしょう。(しかし、イタリア勤務時代にナポリに出張した際、一度取引先のイタリア人に恐る恐る聞いてみたことがあるのですが、彼はこの時、口を濁しながらもほとんどの商店が地元マフィアにみかじめ料を払っていると教えてくれました。)

また、銀行強盗の発生件数は残念ながら欧州一番で、2009年には1753件もの事件が発生しており、イタリア一国で欧州全体の発生件数の40%を占めています。銀行の中に入るのも私物は備え付けのロッカーに入れ、一度に一人ずつしか入れない頑丈な回転扉をくぐり抜けなければならないイタリアの銀行で、いったいなぜ強盗事件が多発するのか謎です。



【イタリアの銀行の入口】

私たちがイタリアに住んだり、旅行で訪れたりする際に気を付けなければならないのは、発生件数的にも被害者となるリスクの高い窃盗事件です。まるで泥棒天国のように先入観を持って見られる(こともある)イタリアですが、2011年には人口1000人当たり24件の割合で発生しています。更にいちいち届け出ても無駄ということなのか、スリやひったくりにあっても半数が、未遂で終わった場合は9割以上が被害届を出さないという統計もあるようですので、やはりここは日本の治安の良さに感謝すべきなのでしょう、日本と比べると被害にあう確率は格段に高いようです。(日本の同年の窃盗事件の発生率は人口1000人あたり8.9件でした。)〈図1〉

私もイタリア在住中に何度か苦い経験がありますが、それらはいずれも一瞬の隙を突く、感心す

るほど芸術的な手口でした。

一度はローマ、テルミニ駅前でのこと。犯人はみずぼらしい恰好をしたジプシーの子供たちです。私を取り囲むようにして“貧乏で食べるものもありません。どうぞ少しのお恵みを。”というようなことを書いた段ボールの紙板を目の前に差し出します。すでに彼らの悪行についても聞いて知っていたので、しっ、しっ、と追い払いながらも、一瞬その紙板に気をとられた僅かの隙に胸ポケットの財布が姿を消していました。何とか難を逃れたつもりでいた私がそのことに気付いたのはしばらくたってからです。

もう一度はミラノ、マルペンサ空港のチェックインカウンター。「気をつけないといかんぞ。」と気を引き締めつつカウンターに立ったのですが、席は窓側がいいとか通路側がいいとか言いながら、対応してくれた美人カウンター嬢にほんのひと時鼻の下を伸ばした瞬間の出来事でした。足元に置いた鞆が消えてなくなっています。今から思っても鼻の下が伸びていたのはほんの一瞬だったはずなのですが、あと思った時には時既に遅し。周りを見回しても自分の鞆を持って逃げ去る人間の姿はどこにも見当たりません。おそらく何人かによるチームプレーだったのだと思うのですが、こちらでも感心するほど鮮やかな手口でした。

一応被害届は出しましたが幸い鞆の中には大したものが入っておらず、大事に使っていたイ・サントの皮靴を盗まれたことの方が悔しい思いでした。そして、数週間後に見知らぬイタリア人から、「ミラノ近郊の道路の側溝に落ちていた鞆からあなたの名刺が出てきた。ひょっとしてこの鞆はあなたのものでは？」という電話がかかってきたのです。親切なイタリア人もいるもんだと思いつつ、お礼に自社のヘッドフォンステレオを差し上げ、少々泥で汚れてはいたものの無事にかわいいわが鞆は私の手元に戻ってきました。しかし、一旦その喜びも落ち着いた後は、今もずっとあの親切なイタリア人こそ臭かったのではと思っています。

アイスクリームや口紅でカモの上着を汚しておいて、「洋服が汚れてますよ」と、親切な声をかけ、脱がせた上着から財布を抜き取る手口や、路上駐車のカルマのタイヤを錐やナイフでパンクさせておき、戻ってきたカルマの持主がパンクに気づいてタイヤ交換を始めると、親切に手伝う風を装って車内の鞆や上着などを盗み去るという手口などは、今や古典的なものですが、新手の手口も次々と現れてきており、全く油断も隙もありません。しかし、もちろん被害が高額だったりパスポートだったりしたら悠長なことは言ってもらえませんが、その芸術的ともいえる技に腹立ちを超えてあきれ、感心してしまうこともままあります。

これもイタリア勤務時代の話。ミラノで日本の本社や欧州各国の関係会社が集まる国際会議を開く折、イタリアに出張してくる会議参加者に対して、こうしたストリートクライムに注意を喚起するメールを配信したところ、あるイタリア人スタッフが顔を真っ赤にして怒っています。いったい何をそんなにカッカしてるのかと話を聞いてみると、「悪いのはイタリア人ではなく、イタリアに住みついている外国人だ。全くもって我々イタリア人に対する侮辱だ。」と、怒り心頭です。確かに、ホスト国イタリア人のプライドを傷つけてしまったなど反省したのですが、統計では2010年に検挙された窃盗犯の55%がイタリア人でした。彼の怒りもわかりますが、ビミョーな数字です。

今回はイタリアの犯罪事情についてお話ししましたが、イタリアは本稿のタイトル通りの国なのか、そうではないのか。ご判断は読者の皆さんにお任せします。さて、イタリアはコワくてアブナイ国ですか？

(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743. 212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

## RiITALIA -イタリア再発見-

### 第8回『政治と友情』

国司 航佑

「カルチョ、政治、女の子…」

ある日友人から届いたメールに、こう書かれていた。

「僕らイタリア人が好んで話題にすることについて、君たち日本人は友達同士で話したりしないんだって？ そんな習慣は、もう捨ててしまったら(笑)？」

メールの差出人は、もちろんイタリア人である(ちなみに、「カルチョ」とはサッカーのことである)。どうやら彼は、私の友人でもある一人の日本人とある日出会って、そこで日本における人間関係について議論を交わしたようである。ところが筆者は、上のような彼の発言に対してそんなことはないだろうと思った。日本でも、サッカーに興味のある人同士はサッカーの話をするだろうし、また女性読者の方々はご存知ないかもしれないが、日本男児のあいだで交わされる会話のなかで「女の子」が占める比率は決して低くはない。もちろん、一国の総理大臣が巨大サッカーチームのオーナーにして自他共に認める女好きだというような極端な事例は見られるはずもないが、それにしてもこの国でサッカーや女性が会話のテーマになることはいたって日常的なことだといってよいと思われる。

しかしながら、こと政治に関しては、彼の言うことにも一理あるかもしれない。考えてみれば、我々日本人は知人友人と政治に関する会話を楽しむということをめったにしない。時事問題と絡めつつ表面的な言葉を二言三言交わすことはあるにしても、互いが自らの意見をぶつけ合うなどということは稀である。かくいう筆者も、政治について友人がどのようなことを考えているのか、ほとんど知らない。そして、その理由を考えてみると、

友人が政治の話を拒否してくるからというよりも、こちらの方が無意識的にそういう話題を避けてきたからなのだろうと思われる。そもそも、国政なる事象は、どんな人間にとってであれ、その人の生活と切っても切り離せない問題を内包するものである。それゆえ、自国の政治に関する見解は、各人の普段の生活態度と密接な関係をもたざるをえない。例えばもし、自分の政治観と真っ向から対立するような人間が目の前に現れたとしたら、その際、進んでその人と友好関係を持つとする人はあまりいないだろう。また仮に、親友が自分の毛嫌いするような政党に投票していることを知ってしまうといった事態が生じたとしたら、そのようなときには、それまで二人の間にあった信頼関係にも多少のヒビが入ってしまうのではないだろうか。畢竟するに、政治というものには、そもそも人と人とを対立させる要素が包含されているのではないだろうか。だからこそ、筆者はこれまで友人と政治の話をするのを避けてきたのだろう。そして、同じようなメカニズムがあるからこそ日本人一般が政治の話題を好まないという現象が成り立っているのかもしれない。

それではなぜ、イタリア人は政治の話を好むのだろうか。それはまず、何より彼らが議論好きだからなのではないか。そもそもイタリアでは、日常会話一般においても意見の衝突は頻繁に見られるものである。集団で物事を決めるときは、一人一人が他人の意見を尊重しつつ自らの意見を堂々と提示する。彼らには、様々な意見を統合することにより正解を導き出そうとする古代ギリシャの対話の哲学(ディアレクティケー)の伝統が、受け継がれているのかもしれない。ただし、イタリア人の「議論」を幾度も目の当たりにしてきた筆者の感覚からすると、意見の衝突が優れた結論を生み出すことは稀なことである。実際は、説得力に欠けた妥協案と多大なる遅延とをもたらして終わることがほとんどなのである。いずれにしても、皆が空気を読みながらいつの間にか全体の意見が決まっているというのが我が国における「議論」の一般的なあり方なのだとすれば、彼我の違いはかなり大きなものであるといわざるをえないだろう。

ところで、先述のとおり、政治に関する意見の相違はときに人々の友好関係を壊しかねないも

のである。そしてそれは、もちろんイタリアの場合でも同様だろう。筆者の個人的な体験に限ってみても、知り合いになったばかりの二人のイタリア人の間で、政治思想の違いが障害となって友情が成立しなかったという例がいくつか思い浮かぶ。一方で、既に出来上がった友達グループについていえば、その構成員一人一人が政治について大同小異の見解をもっていることがほとんどである。だからこそ、率直に自分の意見をぶつけ合うような議論が起きて、友情が崩壊してしまう危険性はそれほど高くないのであろう。要するに、政治観の極端に異なるような人間のあいだでは、そもそも友情は生まれにくいというのがイタリアという国の現実なのではないだろうか。

話がやや抽象的になってきてしまったが、読者のうちには、イタリアにおける政治と友情の関係をより具体的に知りたいという思われる向きもあるかもしれない。そうした方には、筆者の敬愛するイタリア人映画監督パオロ・ヴィルツィの代表作『カテリーナ、都会へ行く』(Caterina va in città)をお薦めしたい。この映画は、クラシック音楽好きの女子中学生カテリーナが、ラツィオ州の田舎町から首都ローマに引っ越すシーンからはじまる。新たに通うことになった中学校の中でカテリーナは慣れない環境に四苦八苦するのだが、中でもまずカテリーナを驚かせたのはクラスが政治的に(左翼と右翼とに)二分されていたということである。それまで政治についてまとも考えたことがなかったカテリーナは、状況をうまく飲み込むことができない。そこで両グループのリーダーたちは、どちらにも染まり得るこの新生を自分のグループに引き入れようと努め始める。カテリーナは最初、「左寄り」のグループに取り込まれる。しかし、そこで高度数のアルコール飲料を摂取していたこと、そして刺青を入れていたことが父親に見つかってしまい、それがきっかけとなってそのグループから離れることになる。次いでカテリーナは、成り行き任せに「右寄り」のグループに加わってしまう。だが、こちらのグループの中でも、貴族風の少年との恋が自分の平凡な家柄がもとで失敗に終わったり、また同様の理由で父親が辱めにあったり、と悲惨な出来事が立て続けに起きる。そして、そんなある日、カテリーナはこうした事件がグループの噂話のネタとなっていることを知ってしま

い、そのグループを離れることに決めるのである。その後、中学校を卒業したカテリーナは、音楽高校(Conservatorio)の入学試験を受けることに決める。カテリーナが本当の「自分」の世界に向けて進み始めるところで、この映画は幕を閉じるのである。



【映画『カテリーナ、都会へ行く』より】(2013.1.24  
<http://www.miss777.com/leixlei.php?sid=576> より)

『カテリーナ、都会へ行く』を観ると、イタリアの若者の人間関係が各人のもつイデオロギーに強く縛られているということがよく分かる。だが、ヴィルツィがこの映画を通して本当に伝えたかったのは、一人一人が抱いているようにみえるこうした「イデオロギー」が実はほとんどの場合が環境の産物なのだということなのではないだろうか。特に、イタリア人の議論を第三者の立場で聞くことが運命づけられている筆者にとっては、カテリーナの視点を通して浮かび上がるイタリア社会の不思議は非常に強い共感をもたらすものであった。筆者は近頃、ベッペ・グリッコを崇拜する友人がベルルスコーニを非難するというシーンによく出くわすのだが、その度に彼らの思考回路がどうなっているのか首をひねらざるをえないことになる。私の目には、両者とも単なるコメディアンであるという風にしか映らないからである。政治についての議論を極力避けようとする我国の習慣も褒められたものではないに違いないが、深い思慮なしにとにかくにも意見を戦わせようとするかの国の現状もまた望ましいものではないのかもしれない。

さて、ここまでイタリアにおける「政治と友情」について論じてきたが、実はこうしたテーマについて考えるとき、筆者がいつも思い出してしまうエピソード

ソードがある。それは、20世紀前半のイタリアを代表する二大思想家、ベネデット・クローチェとジョヴァンニ・ジェンティーレのあいだに起きた、政治と友情にまつわる一つの事件のことである。



【ベネデット・クローチェ】（2013.1.24  
[http://it.wikipedia.org/wiki/Benedetto\\_Croce](http://it.wikipedia.org/wiki/Benedetto_Croce) より）

1890年代後半に出会ったクローチェとジェンティーレは、それから学者としてまた人間として、厚い友情関係を築き上げていくことになる。友として支え合い、また同士として思想的影響を与え合った二人は、時に論争を繰り広げながらもお互いを唯一無二の友人として認めていたようである。そんな二人の友情が途切れたのは、イタリアにファシズム体制が敷かれていく、1920年代の初めのことであった。そのファシスト政権の知的リーダーであったのが他ならぬジェンティーレである。一方のクローチェは、当初ファシズムにどちらかといえば肯定的な態度を示していたが、党が独裁体制を強めていくにつれ疑念を抱き始め、1924年に起きた社会党員マッテオッティの暗殺事件をきっかけにファシズム批判を開始する。30年ほどに渡って交換された膨大な書簡も、それから間もなく途絶えることになる。運命のいたずらか、二人のあいだで最後になされた意見交換は、ジェンティーレの起草した『ファシスト知識人たちの宣言』に対してクローチェが『反ファシスト知識人たちの

宣言』にて返答するという、二人の訣別を意味する政治的手続きであった。これは、国政が極度の緊張状態に至ると、厚い友情までもが無残に打ち砕かれてしまうということを示す良い例であろう。ところで、1924年10月24日にクローチェがジェンティーレに送った最後の手紙には、友情と政治の間に揺れるクローチェの無念が滲み出ている。今回はこの手紙を引用しつつ筆を置くことにしよう。

確かに、私たちの間には、何年も前から学問上の不和がありました。けれども、それはなにも人間関係に影響を与えるようなものではなかったのではないですか。ところが今、そこに実践的・政治的な不和が加わってしまいました。いやむしろ、学問上の対立が、政治的なそれに姿を変えたといった方がよいかもしれません。そしてこちらの方が、より過酷な問題なのでしょう。もはやどうしようもないのかもしれませんが。[...]でも私は、あなたがいうように、あなたとの関係を壊そうと思ったことは一度もありません。そしてそれには、多くの尤もな理由があるのです。まず、私の温和な性格が—それは歳を取る事によってより温和さを増していくのですが—私にそのような行為を許さないからです。次に、仮にそのようなことをしたら、我々の所作を観察しているような連中に恰好の話題を提供してしまうだろうからです。それが噂になり、そして多くの悪意のある連中を喜ばせる結果になりかねません。そして最後に、これは最も重大な理由であり、また最も本質的な理由であります、私が時間のもつ効用を信じているからです。これまでも、意見の衝突が起きたあとで「やはりあなたが正しかった」と言ってきたことが、何どもあったではありませんか。だから私は、多くの過酷な状況が自ずから解決されていくと考えているのです。(Benedetto Croce, *Lettere a Giovanni Gentile*, Milano, Mondadori, 1981, p. 670 より拙訳)。

(元当館スタッフ)

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>